
また逢う日まで

たけ10005

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

また逢う日まで

【Zマーク】

Z9976E

【作者名】

たけ10005

【あらすじ】

高校一年生の東馬都子とうまみやこが小早川智也こばやかわともやと出逢った話です。ネーミングはオチヤメしました。自分で言つのもなんですが、女心の勉強になる綺麗な世界観の話です

出逢い

それは、金色に輝く闇
それは、赤く輝く瞳
近づいてくる…”何か”が

…ん

…さん

…うません！

東馬さん！

は、はひ！？

私は、跳ね起きた

「ここは、どこ？」

「ふうん…周り見てもわからないんだあ…」

…あ

しまった。学校だ…びりしそ…

「はひ…ひゅ～るり～らり～…なあんけつて」

「廊下に立つてなさい！」

怒られちゃつた。

誰もいない廊下。当たり前か。授業中だもん。
あれ？外に誰かいる…校庭の裏庭。授業をサボる人がたまにいる。
今日はなぜか気になつた。

「つて言つても、授業中裏庭見る機会すら無いんだけどね」

「ふうん…立たされても寝言？もう1時間いつとく？」

「い、いえ！もう十分反省した次第であります、隊長！」

「先生です！もういいわ、中入つて授業受けなさい。は～い、みんな～ テスト範囲言いますよ～」

なんだつたんだろ、あの人。いつもは気にならない事が気になつた。
寝不足かな？さあて、今日もラジオ聴くぞ～

「へい、みんな～ ノッてるか～い？今日も張り切つていくよ～！」
変わらない日常。舞い降りたのは、変わった人。しかし、今はまだ、
考えもつかないことだった。

「東馬さん！今日のお弁当は裏庭で食べましょ」

私の親友の景ちゃん。今日もおしゃとやか。なんでもまた私なんかと親友やつてるのかわからぬいけど、天然娘だから、同じ電波を受信したのかも。

申し遅れました。私はラジオ大好きっ子の東馬都子。ピチピチの18歳

彼女は藤林景ちゃん。仲良し二人組は今日も今日とてとりとめの無い話で盛り上がる。今日もそのまま、いつも通りの日常が通り過ぎるハズだつた。あの男の子と出会うまでは。

「私なんかさ～」彼氏いない歴18年よ～。いいわね、モテる景ちゃんは

そうなのです。天然美人はモテるのです。「うらやましいかぎりです。しょんぼり…

「君。そこの水玉。」

水玉？

「はひ…？なんでしょう…」

あれ？なんで私に声かけたってわかつたんだ？…つて！今日の私のふりちうなショーツが水玉やんけ！

「なんですか！？このエッチ！」

「ごめん、ごめん。あんまり可愛かったから。」

え…？

「かわいい？私が？」

「いや、風になびいて見えたそのパンツ」

「…つ！あんたねえ！」

危うくビンタしたくなる衝動を抑えていると、実はその男、けっこ

うカッコいい。しかも灼眼。珍しい。漫画みたい

：いやいやいや！関心してる場合じゃない

「あのや、この辺に子猫いなかつた？最近昼休みにエサあげてたん
だけど、今日は見なくてさ……」

しかも優しい…

「い、いえ…景ちゃん、見た？」

「いいえ…見たら、お教えしますね。」

「よろしくお願ひします」

なんか、景ちゃんには礼儀正しい。

「あの人、東馬さんに氣があるのかな？」

その言葉を認識するには、時間がかかった

「え？ なんで？」

「女のカン」

そう言つた右手の人差し指を唇に軽く当てる。シーツで言つみたいに
「確かにいい男だけど…って違つ！だから、なんで私なのよ！？」

あの男の気になつたのは水玉でしょ！？」

…しまつた。

「…ふつ」

「あ！笑つた！今笑つた！」

そんなこんなで運命の人との出会いはサイアクだった。

「やあ、また会つたね」

ポンと肩をたたかれて振り向くと、変態男。

「昨日はどうも。今度はなんですか？」

「いやなに、近いうちあの友達と一緒に昼食なんかどうかな？って
思つて」

「お・こ・と・わ・り・し・ま・す」

「あはは…嫌われちゃつたなあ…また今度誘つよ」
また誘うんかい！

「どうせ景ちゃんが目当てなんでしょう？美人ですものね。彼女」

すると、赤面するかと思つた男は青くなつた

「違うよ、君が…」

「君が？」

「い、いや、なんでもない」

今度は赤くなつた

「ふふつ…」

「な、何？」

「いえ、「つざき」とみたいでかわいいになつて思つて…あ…」

「つざき…」

「「」みんなそこ、皿。キレイな灼眼だと思つて。やだ、恥ずかしい

…」

すると
「そつか…俺、智也。小早川智也。じゃ！」

私の名前を言つ前に去つてしまつた。

小早川さん…その名を囁みしめる前にクラスメートに話しかけられる

「東馬さん。小早川君とはどういうご関係で？」

「は、はひ…？ 昨日声をかけられたんですね。猫さんいなかつたか？ つて

なんだか団体さんになつてきた。怖い

「そう…言つておくけど、出し抜きは許さないわよ

「はひ？ どういうことですか？」

「とほけないで。私達小早川智也ファンクラブを差し置いて、仲良くなるなつて言つたのよ」

「まつてください」

景ちゃん…

「なんですか？ 藤林さん」

「東馬さんは、鈍くてオクテで、その上彼氏欲しがつてるわりには
男子の情報知らないんですね」

「…酷つ…泣きたい…

「…そうでしたね」

そうなのー?そこは否定して!

「ともかく、彼と仲良くなりたいなら、会費無料の小早川ファンクラブに入りなさい。悪い扱いはしないわよ」「は、はひ…わかりました」

すると、今までの険しい顔から一変、柔らかい表情になつた

「よひしい。では、また」

災害は去つた。景ちゃんが優しく近づいてくれる

「大丈夫?」「めんなさい。ファンクラブのことくらいこいつておけば良かつたわ」

「いいの…ありがと。やっぱり私は恋愛に向いてないね…」

「え?」

景ちゃんは目を丸くする。あれ?何言つてるんだろ?…?

「なんでもない…」

今日は大変な一日だつた

「おー、ぶつかっておいで逃げんのかよ!?」

大変なことになつた。チンピラに絡まれた…ぴんち…

「止めておけよ!」

聴いたことのある声

「なんだと…?おー、野郎赤い田だぜー呪われてんじゃねえの?」

そんなこと言わないで…

「止めてください…」「ああ…?」

「彼の」と、悪く言わないでください」

「なになに?おめえら付き合つてんの?ほんじつ娘と赤い田した美

少年さんよお

「止めるー!」

警察が来た。

「しまつたー覚えてるよー」

チンピラは逃げていつた。小早川君が駆け寄つて来る

「大丈夫?」

「は、はひ…」

付き合つてゐる？って聞かれて「キドキしてる…好き…なのかな？」

「東馬さん、今帰り？送つてくよ…」

紅い夕日と灼眼…顔も赤いかしら？自意識過剰かな？

「はひ…帰りです…お言葉に甘えて…」

その日、私達は恋人になつた。

小早川ファンクラブの皆さんには、それはもうイヤなぐらごとお世話になつた。悪い意味で。でも、私達は困しなかつた。

「都子…俺、来月転校するんだ」

それは、突然やつて來た。

「はひ？で、でも、会えるよね？」

「他県に引っ越す…自立するまでは、ほとんど会えない」

なんでこんなことに？

「で、でも！…でも…」

涙が、浮かんでくる

「『めん、必ず迎えに行く。だから…』

「イヤ…嫌あ！」

私はその場から逃げだそつとした。

「待つて！」

強く、引き寄せられる。そして…

「ん…」

k i s s …

「智也…」

俺、目のことかわいいって言われて嬉しかつた

まだ出会つて2回目の日に言つたこと

「覚えてて、くれたんだ…あの頃は冷たくして『めんなさい』

「俺、あの日よりずっと前から君のこと好きだった」

衝撃の告白。景ちゃんのカンは当たつた

その日、私達はつながつた。

引っ越しの日

「手紙書くから…」

都子は筆無精だったが、気持ちを込めたかった。もちろんメールする。けど、足りない

「俺も電話する。」

『また逢う日まで』

二人の言葉は同時に出了

「ふふつ」

一人で笑った。しばらく泣くかもしれないけど、今は笑ってさよならする。そう、決めたから…

END

出逢い（後書き）

あんまり人気なつたら、次回いきなり最終回にします。うざいで
しょうから。5話外伝2、3の予定です（話数変化の可能性有り）
応援よろしくお願ひします！

めぐり逢い（前書き）

都子は智也と偶然海で出逢う。智也はバスに乗っていて、すれ違う

めぐり逢い

久しぶり！東馬都子です！

あれから1年…あれ以来会つたのは、高校3年の時の15歳の夏。藤林景ちゃんと一人で海の家と砂浜と…景ちゃんのないバーテーを見に来たよ！

なんか、揺れる胸つて良いよね…景ちゃんのお嫁さんになろうかな…智也は全然電話くれない。8割は私から電話してる。。。智也のバカ…

ここには美味しいかわらない蜜があるぞ…こんな体じゃ美味しいくないか…しょんぼり。

帰り道、偶然海の家の前のバス停の近くにいたその時！

「智也？」

そこには、バスに乗り、夏の香りがする智也がいた。においはわからぬけどね

あ…向こうも私に気がついた！手を振つてくる。

「…！」

何を言つてるか聴こえなかつた。

でも、聞き返したくてもバスは乗り降りが終わつたら行つてしまつ。

私は思わず外から駆け寄る

窓越しに手があわさる。人差し指。中指。薬指。親指。小指。手のひら。

ああ…わかる。心臓の音。都子つて呼んでくれる声。全部、全部。

「聴こえるよ、智也。また逢おう！」

ぶるるん！動き出す。

智也はバスを降りようとしてハツとする。予定があるのかな？

もつと。もつといたいのに…愛してる。智也…

愛おしい人の名前を呼ぶ。それだけで、こんなにも満たしてくれる。

思い出が広がる。初めて逢つた時のセクハラ発言。水玉のショーツは、キスした日からずっと大事に取つてあるよ！

チンピラに絡まれた時、強くもないくせに、立ち向かってくれたね。最初はびっくりしたけど、心が強い、勇気ある人だつてわかつて嬉しかった。わかつてる？私が交際をOKしたのは容姿じゃない。安全感があつたからなんだよ。

離れ離れになると告げられた日。ファーストキスと初めての日。別に、それまで怖かったわけじゃないからね。素敵なシチュエーションを狙つてただけ。：ま、待つてたわけでもあるけどね。みんな、みんな大事な思い出。アルバムをめくるような気持ち。智也…あなたは今、何を思つてる？
きびすをかえし、バスに、背を向ける。
バイバイ。愛おしい人…
また逢つ日まで！

めぐり逢い（後書き）

アドリブ小説続編でした。今後は練り上げていきます。面白企画のつもりでした

死（前書き）

夏、バスで智也はなんて言ったか、なぜ連絡少ないかがなんとなくわかる回です。

死

「死んだ」

小早川智也から東馬都子への突然の電話。突然の言葉。海で逢つた次の日のこと

「はひ？ 誰が？ なんで？」

「オヤジとお袋。旅行の交通事故で」

「そ、そんな！ ジャ、昨日バスにいた理由…」

一瞬の静寂が、全て教えてくれた。バスに乗つて病院に行つたんだ。

智也の両親は、夫婦水入らずの旅行に行く途中だつたみたい。

都子がかけつけると、智也は白い棺の前で一人ぽつんと座つていた。部屋に差し込む光が天然のスポットライトのように照りし、棺は神々しい光を放つていた。

都子はためらいつつ声をかけた。

「智也には私がついてるから」

智也は振り向く

周りはほとんど社交辞令みたいな挨拶を交わした。

智也の灼眼に光は無い。

光輝く棺と光を失つた朱い眼。

命失つた者と生きし者。

なぜ！？ 世界中の不条理が都子を襲つた。神が降り、救つてくださつたのは智也ではないの！？

智也と都子は同じ大学に行く予定が狂つて会えなくなつた。

”また逢う日まで”その予定が狂つたことは、ただの予定の狂いでなくなつた。

タントンタタリラタンタントンタントンタラリラタツタツタツ
ツン

携帯？智也からの電話だ！

「親戚の家に世話になりそう。その家の近くの大学に通つことになつた。ごめん」

「はひ…何かあつたの？相談のるよ」

「ただの、家の事情」（私じゃ、ダメ…なのかな？）

「勉強が忙しい…力が分散されて…だから、だから…」

と、智也は都子にますます連絡をくれなくなつた。何の勉強か、聞いても「成功しなかつたら恥ずかしいから」と、答えてくれなかつた。

都子はラジオ好きなので、パーソナリティーを目指した。景ちゃんはモデル兼ファッショントレザイナーを目指した。

大学2年の冬休み、智也と都子は、久しぶりに会つた。

ゲームセンターで時間をつぶして映画を観、公園でランチ。ベタなデートだつたけど、都子は久しぶりに智也に会えて本当に嬉しかつた。

智也はどうなんだろう？口に出してはいけないんだろうな。

「都子…」

木枯らしの吹く中、おやつを取り出しつとした都子の手をとり、消え入りそうな声でつぶやく

「別れよ！」

風が吹く。

私の髪がなびく。彼の髪もなびく。

流れる髪。流れる時間。流れる、思い出…

「…もう、ダメなのかな？私達」

「多分」

そう、智也は言い切る。

二人揃つてきびすを返す。

後ろは、振り向かない。もう追いかけないって決めたから…だから…

やつぱり、いやだよう…

でも、いつかまた逢える…いつ、か…ね…

そんな気がする

日が沈む。夕日がキレイ。あの日も、あんな夕日で…出逢いと別れ。

違う思い出なのに、同じ空。世界は、何も変わってない！

死（後書き）

骨組みはすんなりと、肉付けはわりと断片的に書いてできた話です

再会（前書き）

智也の両親の死。別れ。それらを乗り越えた都子はまた一つ大人になりました

再会

「私、東馬都子！あれから3年。20歳になつたよ！」

ある日、親友の藤林景ちゃんが家に来た

「この雑誌読んで」

「はひい…このグラビア女優、なかなかの上物ですね…」

「そうじゃなくて…」

あれ？珍しい。景ちゃんが笑わず、あきれと怒りで顔が大変になつててる。マジだ

「なになに？」灼眼の貴公子爆誕！その帝王学に迫る！…智也と同じ染色体異常？」

パラパラとページをめくる

「ひ…？なに、これ…」

そこには、もうしばらく見ない顔があつた。小早川智也。元カレ勉強に忙しいって、これなんだ…？

若干20歳にして、いくつもの会社の相談役となり会社を立て直し、電撃デビュー！

資産運用のスペシャリスト、ファイナンシャル・プランナーにもなつたらしい。

都子は努力してパーソナリティーになつた。でも、都子にとつて智也は本当に遠くに行つてしまつた。

さらに2年後、都子は智也の噂は聞けど、泣くことはなくなつた。新しい恋人もできて…過去は過去と割り切つた。それが二人の男への礼儀と信じて…

再会は仕事だった。都子は只今22歳

「今回のゲストは、経済界のスペシャリスト、小早川智也さんです」当たり前のように名前を呼ぶ都子。智也のこんな顔、初めてだ…仕事の顔。

惚れ直したというわけではなく、都子に愛情あふれる笑顔を向かない
智也に愕然とした。

オンエアが終わって、智也に声をかけた都子。

智也…いえ、小早川さん…

振り向く智也。悲しい顔。両親が亡くなつた時でも、別れた時とも
違う顔。知らない、顔。

休憩中、智也に話しかける都子

「はひ…もう、違うんだね…何もかも…」

「…それでも、変わらないことがある」

「はひ?」

「お前の…都子の幸せを願う想い」

「…っ! だつたら! だつたらなんであんな…」

都子は涙を流して続ける

「ひとつ、聞いていいかな?」

「ああ…明日はクリスマスイブだからね…最後のプレゼントだ」

「どうして、私なの?」

「…え?」

「どうして、私を好きだつたの?」

「フツーだつたから。」

「はひ?」

「…はひ」は普通じゃないけど、成績は…学校に張り出された点数
は並み。顔も十人並み。でも、頑張つてた。今も、パーソナリティ
一やつて。夢実現できる力あって、いつもボッとしてるのにやると
きゃやる。ずっと、ずっと好きだつた。」

灼眼はにじみ出る涙を押し出し、顔は笑つて。

「私は…」

寸前でスタッフが来た

親友の景ちゃんとカフェでランチ

「景ちゃん…今付き合ってる人いて、でも、ずっと待つてた人が現

れて、私に笑顔と泣き顔見せて…それでも捨てなきゃいけないのかな？」

「一瞬の氣の迷いで全てを壊してはダメ。積み上げてきたものは何？」「？」

都子は、立ち上がった。

「智也ー！」

その後再会を果たした。

あの時と同じ。夕日に当てられた緋色^{ひいろ}の世界。あきらめない。あの日私たちは通じ合つた。わかりあえた。だから今日も乗り越えられる！

再会（後書き）

あとがき

今回はシリアス最高潮！ラストは、また多少コーカモラスです！

別れ（前書き）

智也の両親の死。別れ。それらを乗り越えた都子はまた一つ大人になりました

別れ

私、東馬都子！あれから3年。20歳になつたよ！

ある日、親友の藤林景ちゃんが家に来た

「この雑誌読んで」

「はひい…このグラビア女優、なかなかの上物ですね…」

「そうじゃなくて…」

あれ？珍しい。景ちゃんが笑わず、あきれと怒りで顔が大変になつててる。マジだ

「なになに？」灼眼の貴公子爆誕！その帝王学に迫る！…智也と同じ染色体異常？」

パラパラとページをめくる

「ひ…？なに、これ…」

そこには、もうしばらく見ない顔があった。小早川智也。元カレ勉強に忙しいって、これなんだ…？

若干20歳にして、いくつもの会社の相談役となり会社を立て直し、電撃デビュー！

資産運用のスペシャリスト、ファイナンシャル・プランナーにもなつたらしい。

都子は努力してパーソナリティーになった。でも、都子にとつて智也は本当に遠くに行つてしまつた。

さらに2年後、都子は智也の噂は聞けど、泣くことはなくなつた。新しい恋人もできて…過去は過去と割り切つた。それが二人の男への礼儀と信じて…

再会は仕事だった。都子は只今22歳

「今回のゲストは、経済界のスペシャリスト、小早川智也さんです」当たり前のように名前を呼ぶ都子。智也のこんな顔、初めてだ…仕事の顔。

惚れ直したというわけではなく、都子に愛情あふれる笑顔を向かない
智也に愕然とした。

オンエアが終わって、智也に声をかけた都子。

智也…いえ、小早川さん…

振り向く智也。悲しい顔。両親が亡くなつた時でも、別れた時とも
違う顔。知らない、顔。

休憩中、智也に話しかける都子

「はひ…もう、違うんだね…何もかも…」

「…それでも、変わらないことがある」

「はひ?」

「お前の…都子の幸せを願う想い」

「…っ! だつたら! だつたらなんであんな…」

都子は涙を流して続ける

「ひとつ、聞いていいかな?」

「ああ…明日はクリスマスイブだからね…最後のプレゼントだ」

「どうして、私なの?」

「…え?」

「どうして、私を好きだつたの?」

「フツーだつたから。」

「はひ?」

「…はひ」は普通じゃないけど、成績は…学校に張り出された点数
は並み。顔も十人並み。でも、頑張つてた。今も、パーソナリティ
一やつて。夢実現できる力あって、いつもボッとしてるのにやると
きゃやる。ずっと、ずっと好きだつた。」

灼眼はにじみ出る涙を押し出し、顔は笑つて。

「私は…」

寸前でスタッフが来た

親友の景ちゃんとカフェでランチ

「景ちゃん…今付き合ってる人いて、でも、ずっと待つてた人が現

れて、私に笑顔と泣き顔見せて…それでも捨てなきゃいけないのかな？」

「一瞬の氣の迷いで全てを壊してはダメ。積み上げてきたものは何？」「？」

都子は、立ち上がった。

「智也ー！」

その後再会を果たした。

あの時と同じ。夕日に当てられた緋色^{ひいろ}の世界。あきらめない。あの日私たちは通じ合つた。わかりあえた。だから今日も乗り越えられる！

別れ（後書き）

あとがき

今回はシリアス最高潮！ラストは、また多少コーカモラスです！

最終回 一人の未来（前書き）

智也と再開した都子の未来は！？いきなり衝撃的！最後は目頭が
つくなつたらうれしいです！最後までお付き合いいただき、ありが
とうございます。

最終回 一人の未来

ねえ、ママ？パパのアルバイト？」

私、都子がついに母になつてしまつたのです 4歳の娘麗奈がパパの昔の写真見たいって言つから探してるけど、私のはどうでもいいのか、娘よ…

「はひ、あつたよ麗奈」

アルバイト見て、思い出話を聞く麗奈

麗奈はハキハキ、しつかりしててる。はひはひ言ってる都子により、反面教師になつてる母のせいか、しつかり者の夫似なのか…？

22歳の再会から、半年。また忙しい中小早川智也と会つた。

その時、都子が海に行こう！と智也を誘い、智也は嫌がつた。なんと力ナーヴチだつたから。最初は意外で笑つてしまつたけど、やつぱり人間なんだなあ…つて安心したつけ…

智也は腰まで浸かる高さで泳ぎの練習。やつぱり真面目な努力家だなあ…と思つたら、高波がきて溺れる。

「あははっ！智也、間抜け！」

「つるせい！…ちょっと潜つて」

「はひ…頑張り屋さんの願いを叶えてしんぜよう！」

「無い胸張つても何も出ないよ」

「ひつ！」

無理やり智也の頭を掴んで海に引きずりこむ都子。

しかたがないから、言われた通り潜る都子。

目を開けると目の前に智也の顔が…そしてキス…しょっぱい。でも…智也の味。やっぱり私は智也が好き！安心できて、私を見て…今じゃ声かわいいけど顔普通と、ラジオ局社内の評価が偏つて不満だつたけど、景ちゃん、智也は笑顔かわいいって言つてくれる…

「私もママの笑顔、綺麗だと思うよ！」

ふと、現実に戻る。

みんな、ほめてくれる。普通なのに。でも、珍しくサ王てる私はわかつた。

愛すべき親友、景ちゃん。愛する夫、智也…そして娘の麗奈。景ちゃんも智也も麗奈もみんな、タイセツナヒト。そして、私もタイセツ一想ウヒト

最終回 一人の未来（後書き）

泣くより、みんなの幸せを押し出しましたが、人によつては感動…してほしいなあ…。最初は出逢いと別れだけを書いたのですから、題名は「また逢う日まで」です。しかし、できるだけ書くことにしました。恋人の話は今回が最後です。只今、蚊から逃げ回っています。（いらないよ、そんな時事ネタ。

外伝1クリスマス（前書き）

見事結婚した都子と智也。今回は娘の話です

外伝1クリスマス

（聖夜の贈り物）

「麗奈、聞いた？サンタクロースつていないんだって…」

「三太クロス？サザンクロスもびっくりね…」

「ボケたよね！？ねえ、ボケたよね！？私本気よ」

「サンタさんがクリスチャンなら、”信じるものに”やつてくれるよ」

そう幼稚園のクラスメイトに答えた麗奈。

しかし、一番残念だったのは麗奈だった。

（今年のプレゼントは絶対欲しいのに…）

口に出したら、手に入らない気がして、一人ご ciòることもなかつた。

父の智也はほとんど飛行機で眠り、家にいない。

母の都子はそんな智也のため、秘書試験と家事とパーソナリティーの仕事に大忙し。

今年のクリスマスも仕事で、都子は麗奈と過ごしたくて仕事先まで連れまわす。

クラスメイトの言葉が頭を巡り、たまらなくなつた麗奈は、ついに疑問を口にした

「ねえ、ママ…サンタクロース本当はいの？」

子供にはウソをつけない。だから大人の行く喫茶店に行つて話した。先に話し始めたのは麗奈だった。

「サンタさん…」

一瞬の静寂。言葉を選ぶべきじゃない。ホントのことを…

「はひ？ロシアの北のナントカランドにいるよ。ねずみいランドじやなく」

「アイスランド？」麗奈は小首を傾げて情報を確かめる

「そう、それ！」

都子はポンと手を叩く

麗奈は、それでも疑惑を解消しきれない

「…ホントはね、サンタさん1人じゃないの。イスラムに事務所があるて、大勢のサンタさんが世界中からクリスマスカードを受け取つて、世界中の子供達に配つてるの。アメリカではポピュラーナのよ」

智也は仕事でいいけど、都子達が家に帰つて来ると、プレゼントが家の前に置いてあつた

「私、いらない。」

確かに麗奈の希望したプレゼント。間違いないのに…事務所に送る前に麗奈に確かめた。

「だつて、クリスマスカードに書いたつて言つたじゃない」

「そうだけど、違うの…」

?なにがなにやら…都子は首をひねる

「希望プレゼント、変わつたの」

それは、麗奈の悲痛の叫びだつた。都子に似て温厚で大人しい娘が、唇をとがらせて、家に上がる気配も無い。

「そんなん…急に言われてもサンタさん、困るわよ…」

「いやなの！パパじゃなきゃいやなの！」

麗奈はかぶりを振る。

すると、星空に雲ができ、雪が降る

「はひ？さつきまで晴れてたのに」

都子は寒くないかと麗奈を見た

ひしゃげた顔は頬を割り、雪が溶けたか、涙かはわからないが銀の糸を垂らす

「希望プレゼント…そつか…で…も？」

人影に気がついた都子。目線を追つた麗奈の表情が変わる。パアッと太陽のような笑顔。その先は…

「パパ！」

二人は、同時に呼んだ！愛しい人、智也。

「今まで仕事バカだからな、秘書になる都子に怒られる。幸せにし

てやりたかった。二人とも。一番大事なのは家族だから！ただいま

「おかえりー！」

皆が喜んだ。都子も麗奈も

メリークリスマス！

外伝1クリスマス（後書き）

サンタは多分アイスランドです。間違えてたら申し訳ございません

結婚式（前書き）

今日は若い人に読んでいただきたいものです。若くない方は、若返つてください！（お前が合わせろ

「わたくし、小早川智也と東馬都子との結婚式にご参加いただき、ありがとうございました」

両親への手紙

サワサワ

参加者は皆、智也の両親の事情を知ってる。人柄まで知ってる人は少ないので、興味からか、にわかに活気づく。

「父さん、母さん、俺はあなた方を失つた時は人が変わつてしまつた。しかし！僕はあなた方と、都子さんの写真を見てた。

クにもあつた。今この世で、俺の心を支えられるのは、都子さんだけです！断言します！」

ハチバチ

溢れんばかりの喝采。皆涙を流して拍手し、智也の親友も涙を流す。智也も都子も嬉し涙を流して手を握った。

「実は、続きがあります。」
智也はイタズラっぽく笑い、続ける。

「俺は、今まで猛勉強して、一人でここまでし上がつて来た氣でいた。覚えてる？初めてファイナンシャルプランナーになるって言ったのは中学3年のことだつた。急に進路変更するより、今まで決めた学校で1番狙おう？って言つたのは母さんだつたね。父さんは『好きにしろ。』と、ぶつきらぼうに言つた。正直、ムカついた。

今は、あの頃は本当に自分のことしか考えてなかつたと反省します。父さんは進路のことなんか興味なさそにしていたけど、合格発表に来てくれた。俺、初めてわかつたんだ。さりげなく俺のこと心配してくれたんだって。今ならわかる。父さんが『好きにしる』と言つたのは、若いうちに四苦八苦しきつてことだったんだね…。母さんも。試験前まで近所の神社に何回もお参りしてくれたんだって、近所のおばさんから聞いた。

俺、高校で引っ越し決まつて都子と離ればなれになるつて聞いて、俺の人生めちゃくちゃにする氣か！？つてキレたよね。俺だつて、同じ立場だつたら引っ越しするつて、今なら思う。

みんな、”今なら”で”めん。本当は”今でも”つて言つてやるべきなんだよな？”

面と向かつて言いたかった。今まで育ててくれてありがとう。ありがとう、”じやー…まし…た…”

都子は優しく微笑んで、手を握り締めてくれる。その手から、よく続けられたわね、偉いわ。つて思つてくれてるのがわかる。父さん、母さん、俺、こんな良い嫁さんもらつちやつた。ありがとな、みんな！

結婚式（後書き）

私は親は健在ですが、皆さんはいかがですか？親孝行、してくださいね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9976e/>

また違う日まで

2010年10月23日01時37分発行